復讐―ツミヲツグナエ―

零【zero】

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
復讐―ツミヲツグナエ―

【Ｎコード】
Ｎ５９４５Ｖ

【作者名】
零【ｚｅｒｏ】

【あらすじ】
ある日、妹が死んだ。俺のたった一人の家族だった妹が殺された。
その真実がなかなか受け入れられなかった。やっと受け入れると、俺の体はもう壊れていた。憎しみに蝕まれ―
俺は復讐を誓う。法で裁けないのなら、この俺が、裁いてやろう。

第一章　『いってきます』　【1】

真っ白なユリの花が飾られた、華やかだけど物悲しい。そんな小さな壇に、写真が飾られていた。
写真の中の女の子は、太陽のようなひまわりをバックに、写真を撮る兄へ無邪気な、それこそ太陽のような笑顔を見せていた。

――写真。それは、二度と戻れない一瞬を切り取った、大切なモノ。親にそう言われてから、俺は大切な写真もそうでもない写真も、全てをアルバムに閉じ保管していた。
それが、こんな形で役立つことになるなんて…。俺は一人、自嘲気味に笑う。

あの写真は、去年、近所の花畑に連れて行ったときのやつだったか。そのときのことは、昨日のことのように覚えている。たくさんのひまわりに囲まれ、はしゃいでいた…。帰るときには、すっかり疲れきって、俺に背負われていた。眠気を堪え、頭をカクカクとさせながら、『来年も来ようね？』と言っていた。俺は『来年も再来年も、お前に反抗期がくるまで連れてきてやるよ』そう言って、微笑んだ。

「今年は連れて行ってやれなくて、ごめん」
俺は写真に向かって話す。そう呟いただけなのに鼻の奥がツンとして、もう流しつくしたはずの涙が流れた。

「拓哉君。瑠佳ちゃんのこと、なんていったらいいのか…。困ったことがあったら、何でも言ってね？できるだけ、力になるから」
「はい。ありがとうございます」
隣の部屋のおばさんに涙を堪えてそう答えると、俺は静かに椅子

に腰掛けた。

遠くのほうで、話している声が聞こえる。

「まだ高校生なのにね…」

「あんなにいい子だったのに。なんて酷い…」

「小さい頃に親に捨てられて…。本当に気の毒…」

同情か、嘲笑か。どっちだって、対して変わらないような気がする。死んでから気を使われたってな。

あの写真は、妹の遺影。今年小学校に入学したばかりの、年の離れた俺の妹。妹は俺にとってただ一人の家族だった。

母さんが瑠佳を妊娠してすぐ、父さんが死んだ。母さんは瑠佳を産んだけど、三年後、まだ中学生だった俺と三歳の瑠佳を置いて家を出た。俺が朝起きると、涙で滲んだ書置きの手紙と、今月の生活費と書かれた封筒が置いてあった。手紙には『ごめん』とだけ書かれていた。

俺はそれだけで、全てを理解した。

それから俺は、母さんからの仕送りや、バイトで稼いだ金で何とか生活してきた。母さんを恨んだ事は無い。こんなことをいうのも変だけど、あの状態の母さんじゃあ、俺たちを捨てたことは仕方なかったとしかいえない。

母さんは、父さんのことも、俺たちのことも忘れて、幸せになるべきだったんだ。

―だから、仕方ない。ずっと、自分にそう言い聞かせてきた。

だって文句を言う相手も、反発する相手もいないんだ。毎日を生きるのに精いっぱいで、自分を捨てた親の事なんかいちいち考えていられる時間なんかない。

もういい。自分の娘の葬式にも出ない親がどこにいる。…嗚呼、ここにいたか。まぁ、そもそも居場所が分かんないんだから、教え

てもやれないが。

でも、嗚呼。瑠佳と過ごす日々は毎日が楽しかった。もしかしたら、寂しい思いもさせたかもしれない。悲しい思いもさせたかもしれない。あの子がどれだけ我慢したか分からない。欲しい物を買ってあげられなかったし、おいしい物を作ってあげられなかった。

でも、瑠佳はいつも『お兄ちゃん』と呼んで、笑ってくれた。ワガママも言わない、聞き分けのよい、いい子だった。たとえシスコンといわれたって構わない。そんなこと、勝手に言っていたらいい。俺にとって瑠佳がすべてで、瑠佳にとって俺が全てだっただろうから。

どうして俺たち兄妹にばかり、こんなに不幸が訪れるのだろう。不幸が訪れるのなら、俺に来ればよかったのに…。

「なんで…こんなことに…」

今からちょうど一週間前。瑠佳の七歳の誕生日だった。

＋＋＋＋＋

『瑠佳！！遅刻だ遅刻！！』

そう言って、自分の準備もそこそこに妹の髪を梳かしてやる。

『これでよし』

ランドセルを背負わせ、黄色い帽子をかぶせる。

『ねぇ、お兄ちゃん、今日が何の日か…覚えてる？』

『んー？何かあったかなぁ？』

『お兄ちゃ…』

『うそうそ。冗談だって。可愛い妹の誕生日なんか、忘れるわけないだろ？』
そう言って、瑠佳の頭を撫でてやった。フワフワの髪が手の平に心地よかった。
『えへへ。今日ね、おうちにお友達よんでいい？』
『おう。いいぞ。誰がくるんだ？』
『カナちゃんと、さつきちゃんと…あと…くん。』
『んー？なに君だってー？』
『ちっ、ちがっ…。違うもん！！』
そう言うと、瑠佳は林檎のように真っ赤になった。
『そうか。ついに瑠佳にも好きな人が…。でもな、気に食わない奴だったら、兄ちゃん瑠佳をお嫁にはあげません！！』
『お兄ちゃん…？』
『ははは っ。ほら、早く学校行って来い』
『うんっ。いってきます』
『いってらっしゃい、瑠佳。気をつけてな』
『うんっ！！』
駆けていく瑠佳の後ろ姿が、朝日にまぶしかった。いつもどおり

の、いや、小学校に入って初めての誕生日を迎えた、朝。白いフリルのワンピースが風に揺れて…。

＋

＋＋＋＋

あの日は、とびっきり幸せな日になるはずだった。誕生日プレゼントに、瑠佳が欲しがっていたくまのぬいぐるみも内緒で準備していたし、ケーキもできるだけ豪華なやつを買っていた。

瑠佳の友達を呼んで、盛大に祝ってやろうと思っていた。学校に行く前に瑠佳の友達の親御さんにも連絡して、どうにか頼み込んだ。

でも、瑠佳は帰ってこなかった。

どんなに待っても、帰ってくることはなかった。

そのとき鳴り響いた、一本の電話。

瑠佳の『いってきます！！』という元気な声が、まだ耳の奥に残っていた。

『いってきます』【2】

「雨が…」
初めは小さかった雨音が、次第に大きく、激しくなっていく。
そうだった。あの日も、こんなふうに雨が降っていて…。

＋＋＋＋＋

「瑠佳、遅いな」
俺は準備の手を止め時計を見た。時刻は4時過ぎ。瑠佳はいつも遅くても3時半には帰っている。雨も本降りになってきたし、過保護かもしれないけど迎えにいってやるか。と俺は立ち上がった。
部屋の飾りつけはよく分からないので手付かずだが、テーブルの上には誕生日用の蝋燭が立ったケーキと、俺の自信作の料理が並んでいた。瑠佳の友達の親も作って持って来てくれるらしいから、そんなに多くは無い。くまのぬいぐるみも、赤いリボンを纏ってちゃんとスタンバイしている。少しむず痒い気持ちになりながらも、俺はそのくまをそっと抱きかかえた。

そのとき、一本の電話が鳴った。俺はくまを小脇に挟み、受話器をとる。
「もしもし。楠木です」
『警察です。君は、楠木拓哉君？』
「はい。拓哉は俺ですけど。…警察がなにか用ですか？」
『その様子じゃあ、まだ、知らないんだね。落ち着いて聞いて欲しい。実は、瑠佳ちゃんが…』

「は…？」
その続きを聞いた途端、これは性質（タチ）の悪い冗談だと思った。とても現実に起きたことだとは信じられなかった。信じたくなかった。
でも、心のどこかでこれは実際に起こったことなんだと、認識している自分がいる。
「嘘だ。嘘だ！！瑠佳は、今日が誕生日で、だから！！」
『…君が取り乱すのも分かる。とりあえず、署まで…』

その続きは、聞き取れなかった。俺の震える右手が、受話器を床に落としたのだ。とても、掴んではいられなかった。受話器から聞こえてくる警察の声が、いやに遠く聞こえる。

次の瞬間俺は、くまを持ったまま雨の中へ飛び込んでいた。傘なんか差している場合じゃない。俺は道行く人々を蹴散らし、一心不乱に走った。冷たい雨が、俺を濡らして行く…。

早く行って、この目で確かめるんだ。冗談だって言って笑う、瑠佳を見るんだ。そして、家につれて帰って、誕生日を祝ってやって、その後でキツく叱るんだ。

だから、絶対に嘘に決まっている。そんな、瑠佳が…ルカガコロサレタナンテ…。

＋＋＋＋＋

警察からことの詳細を聞き、車に乗せられて数十分、俺は大きな白い建物の前で降ろされた。
「病院…？」

そこからどうやって瑠佳がいるという、そのへやの前までいったのかは覚えていない。俺は頭の中が混乱していて、とてもそれどころじゃなかったのかもしれない。

俺はドアを勢いよく開け、瑠佳がいるという部屋の中に飛び込んだ。――そこには瑠佳の姿は無かった。あったのは、白い布を掛けられた、瑠佳と同じ大きさぐらいの、人型の何か。

そして、何も考えずにそれをめくった。手先に僅かな祈りを託して。微かに指が震えていたような気もする。そこにいたのは…

「る…か…」

瑠佳はそこにいた。朝、学校へ出かけて行ったときと同じ、白いフリルのワンピースを着て。でも、何かが決定的に違う。

「ははははっ。おい、瑠佳。兄ちゃん騙されねぇぞ。起きろ。家に帰ろう」

いくら揺すっても瑠佳は起きない。それどころか、その体は完全に体温を失っていて…。

「もうおしまい。もう十分びっくりしたから。警察の人に迷惑かけちゃ駄目だって言ったろ？兄ちゃんな、おいしいのいっぱい作ったんだ。早く帰って食べよう。みんなで…誕生日パーティ…やるんだろ？」

瑠佳は、起きない。俺は瑠佳の小さな手を包み込んだ。

そう、瑠佳が眠れないときは、いつもこうやって手を握ってやっていた。瑠佳が眠れるまで、そっと見守った。瑠佳の手はいつでも、夏のイヤになるほど暑い日も、冬の凍えるような寒さの日も、いつだって暖かかった。ぬくもりを失うことはなかった。

顔は紙のように白く、生気を失っていた。包みこんだ手は氷のように冷たい。長いまつげは伏せられたまま、ピクリともしない。それじゃあ、まるで…まるで…

「まるで、死んだ…みたいだよ…」

俺の目から、熱い雫が零れ出た。それは瑠佳の頬に落ちる。いくつもいくつも。
「おい、おい…瑠佳、瑠佳！！！」
俺は今まで瑠佳の前で一度も泣いたことが無かった。寂しいだろうから、せめて俺だけは明るくしていようと、泣かなかった。
「なんで…こんな…冷たいんだよ…。なんで…返事…」
俺は、冷たくなった瑠佳の体を抱きしめた。
「ほら…くまのぬいぐるみ…お前、欲しがってただろ…？誕生日プレゼント…」
そして震える手でくまを見せる。瑠佳は、反応しない。
「なんで…なんで…瑠佳が…こんな…」
本当なら今頃ケーキを食べて、みんなに祝われて、幸せそうにしているはずだったのに。

俺はくまを抱きかかえたまま、床にへたり込んだ。涙が、すでに雨で濡れてしまったくまに染みていく。
誰が、瑠佳をこんなにしてしまったのだろう。あんなに優しい子を、誰がこんなにしてしまったのだろう。
「誰が…誰が瑠佳を！！」
瑠佳を失った言い表せない喪失感と悲しみは、一瞬で犯人への憎しみで塗り潰される。俺は気づけば、警察の喉元に飛び掛っていた。
「クソッ…誰が！！」
「お兄さん。気持ちは分かりますが、落ち着いて…」
「落ち着いて…られるかよ…クソ…クソ…」
憎しみに全ての感情が支配される。誰が、どこのどいつが、瑠佳を…。
――ダレガ…ダレガ…ダレガ…ルカヲ…コロシ、タ？
再び地面にへたり込む。体に力が入らない。
「クソッ…畜生…・」

醜く顔を歪ませながら、なんども地面に拳を叩きつける。拳が擦り切れ、痛みが走る。血が…。

「こんな…こんな…っ！！」

こんな痛み。こんな苦しみ。瑠佳は、もっと苦しかっただろう。どれだけ痛かったろう。さぞ辛かったろう。

ごめん。迎えにいってやれてれば、こんなことには…。

消えることはないと思っていた命が消えると、人はこんなにも壊れてしまうのか。

俺の叩きつける拳の音だけが、静かな部屋の中に響いていた。

『いってきます』【3】

＋＋＋＋＋

俺はあの後家に帰った。どうやって帰ったかは覚えていない。泣き叫び、暴れたのだろう。とても一人で帰れる状態ではなかった。警察が家まで送り届けてくれたらしい。

警察が帰ったあと、俺はしばらく部屋に立ちすくんでいた。ここは、こんなに広かっただろうか。瑠佳がいなくなっただけで、ここはこんなにも広く、静かになるなんて。

ケーキの蝋燭に火を灯す。七本の蝋燭は、儚く、静かに揺れた。

『誕生日、おめでとう』

人は、こんなにも簡単に炎を消すことができるんだ。人の命はこんなにもあっけなく、弱弱しくて…。自分もそんな人間の一人だと思うと、嫌悪感が募る。

瑠佳、俺は…兄ちゃんは…こんなにも弱い人間なんだよ…？

そして、炎を吹き消した。あたりは暗闇に包まれる――

―それでも同じように、朝は訪れる。

どんなことがあっても、太陽の光は平等に降り注ぐ。

犯人はまだ捕まっていない。瑠佳の人生を奪った奴が、いまものうのうと『生きている』なんて。そいつが、言い表しようもないほど憎い。いままで一度も抱いたことのない感情。苛立ちに似た、身体を引き裂かれるような痛みを伴う感情。

でも、きっとそいつは警察が捕まえて、死を以って罪を償わせるだろう。今俺がすべきことは、そいつを捕まえて償いをさせることじゃない。そう、俺がしなくてはいけないことは…

＋

俺は虚ろな目で立ち上がり、台所へ向かう。
鋭利な刃物を取り出すと俺は自嘲気味に笑った。この世にもう未練は無い。
『待ってろよ…兄ちゃんも、今行くからな…』
そして、冷たい刃物を自分の肉体に押し当て、俺は…俺は―――

＋＋＋＋＋

服の上から、キツく胸に巻かれた包帯を触る。鋭い痛みが走った。
「祐太…実沙希…」
俺は顔を上げ、遠くから歩いてくる制服姿の男女を見つめた。水崎祐太と刈谷実沙希。親友と幼馴染の姿を。

俺が目覚めたとき、聞こえてきたのは幼馴染の啜り泣き。それに親友の『馬鹿野郎』という喝と張り手だった。そして涙目の親友が言った。『お前は瑠佳ちゃんの分も生きなきゃ駄目だろう』と。

「拓哉、傷は？」
実沙希の問いかけに俺は曖昧に首を傾げる。何針も縫ったのだから本当なら何ヶ月も入院していなくてはいけないのだが、瑠佳をそのままにはしておけないと無理を言って、ここまで出てきた。

結局俺は死ねなかった。心臓に大きな傷を抱えて、生きるしかなかった。
それからはずっと病院に入院していて一度も家に帰っていない。家の片付けは、隣のおばさんがやってくれたらしい。無表情で、血だらけになりながら自分の体を切り裂く俺を、一番最初に見つけてくれたのもおばさんだった。

「さっきそこで、警察の人に会った」
「ああ」
「お前はずっと寝てたからな。…早い話が、犯人が捕まった」
「え…？」
「森田慎司。２０代後半の、フリーター。殺す気は無かった、と言い張っているらしい」
俺の中で、憎しみという感情が膨れ上がる。
コロスキハナカッタ？ジャアナンデ、ルカハシンダノ？
俺の手が、怒りにわなわなと震える。
「森田慎司…」
モリタ、シンジ。モリタシンジ。モリタシンジ、モリタシンジ、モリタ…
「落ち着け。もう一つ、奇妙なことがあってな…」
「奇妙な…こと？」
「まだ決まったわけじゃないからなんともいえないが…このままじゃ、森田は無罪になる」
「ちょっと、裕太！！それはまだ…」
実沙希の声が遠くに聞こえる。

「ははは っ。何言ってるんだ？この後に及んで冗談なんか言うなよ」
気が狂ったかのように高笑いすると、実沙希と祐太を交互に見た。その表情は重く、険しかった。
「冗談じゃない」
「…は？」
「森田には、このままじゃ極刑はおろか実刑が与えられるか分からない」
俺は、言葉を失った。
「は？なんでだよ。捕まったんだろ？」
「それが…。森田慎司は、三ヶ月前に死んでいるんだ」

モリタハ死ンデル…？
「…ふざけてんじゃねぇよ」
俺は、祐太の襟元を掴んで捻りあげる。
「死んでる？ははは っ！！馬鹿にすんなよ。森田は生きていて、瑠佳を…瑠佳を殺しただろ！！」
「だから奇妙だって言っただろ！！」
祐太も俺の襟を掴み、その衝撃に俺たちはそのまま地面に転がる。椅子の転がる、激しい音がした。
「混乱しているのはお前だけじゃない！！もし本当に森田が死んでいたんだとしたら…」
「森田は生きてる！！」
「もしも、だ！！もし死んでいたんだとしたら、法じゃ裁けない」
「じゃあ瑠佳はどうなるんだよ！！」
頭が混乱してする。感情のコントロールができない。分かる感情は、憎しみ。
俺は本能のまま、祐太に殴りかかった。
祐太はそれを手で受け止めると、俺の頬を思いっきり殴った。
「落ち着け！！話を聞け！！」
「くそ…」
俺はそのまま、床に転がった。
「今の時点では何がなんだか、警察も分かってない。だからお前は、今は生きろ」
「…やる」
死ンデヤル。死ンデヤル…殺ロシテヤル
祐太の声は、俺の耳には届いていなかった。憎い。その、森田という男が…ニクイ…
「…頭、冷やしてくる」
「拓哉！！」
殴られた頬を押さえ、俺は立ち上がる。
俺の名前を繰り返し呼ぶ祐太に背を向け、雨に濡れるのもかまわ

ずに外へと出て行った。

＋＋＋＋＋

瞬く間に全身が雨に濡れ、雨が怒りで火照った俺の体を冷ましていく。自分がどんどん壊れていくのが分かった。

そのとき、俺の胸ぐらいの高さに傘が差し出された。

「お兄ちゃん。風邪引いちゃうよ」

「え…？」

一瞬、言葉を失った。小さな女の子の手が、必死に俺に傘をかぶせようと伸ばされる。瑠佳によく似た、背格好の…。俺は振り向くと、そこに立つ女の子に向かって微笑んだ。そっと傘を受け取ると、しゃがんでその女の子にもかぶせる。

「ありがとう。…カナちゃんだっけ？」

「うんっ」

「…ごめんね。誕生日会、できなくて」

そっと女の子―瑠佳の友達の、カナちゃんの頭を撫でる。

この子は瑠佳じゃない。一瞬でも期待した。これで思い知らされた。瑠佳は戻ってはこないんだ。

暖かい雫が頬を伝う。きっと、瑠佳は俺が死ぬことを望んではいなかっただろう。瑠佳は、優しいから。

瑠佳が死んだから。瑠佳は一人ぼっちだから。瑠佳は寂しいだろうから。そう言い訳をして、瑠佳の傍に行くといって、俺は『死』に逃げた。あの子はそんなことでは喜ばないと分かっているのに。

死ねば瑠佳と同じところにいけると思った。でも、全ては俺の自己満足。

「ごめん…」

「お兄ちゃん、泣いてるの？」

「大丈夫？」
小さい手が、俺の涙を拭う。
「うん。もう大丈夫」
「よかった。…るかちゃんが『遠いところ』にいっちゃって、カナすっごく寂しいから…。瑠佳ちゃんのお兄ちゃんは、もっと寂しいでしょ？」
俺は固まった。悲しいのは俺だけじゃない。この小さな女の子も、瑠佳がいなくなって寂しいと言ってくれる。
「…寂しいよ。すっごく寂しい」
「か、カナに何か、できることはない？」
こんなに小さな子でも、人を気遣うことができる。人を思いやって、慰めることができる。どうして人間は、そんな当たり前のことに気づけないのだろう。六歳の少女でもわかることが、なぜわからない…？
俺はカナちゃんに優しく微笑む。
「じゃあ、一つおねがいしてもいい？」
「おねがい？」
「瑠佳のことを、ずっとずっと覚えていて欲しいんだ。カナちゃんのお友達の中に、楠木瑠佳っていう女の子がいたことを、覚えていてくれる？」
カナちゃんは一瞬ポカンとしたが、とびっきりの笑顔で答えた。
「うんっ！！」

俺は、このときの笑顔を一生忘れないだろう。

これで安心だ。たとえ俺がこの世から消えてしまっても、瑠佳を覚えてくれている人はいる。
だからって、むざむざ命を投げ出すことはもうしない。死ぬなら、あの男―森田を道ずれにしてやる。

覚悟を決めた。どうせ壊れるなら、壊れるところまで壊れてみよう。堕ちるところまで堕ちてみよう…。

「瑠佳。『いってきます』を言ったら、『ただいま』も言わないと駄目だって、あんなに言っただろう」

俺はそう言って、涙を拭った。

森田(あいつ)がどんなトリックを使ったんだとしてもそんなことは知らない。法で裁けないのなら、俺がこの手で裁いてやる。手が汚れたってかまわない。

ここからが、俺の復讐劇の始まり。

そして、幸せな時間の終わり―。

第二章　家族　【1】

放課後―ホームルームが終わると、俺は重い鞄を肩に担ぎ教室を出る。
「なぁ、楠木。お前今日暇か？宮校の女子と遊ぶんだけどさ、お前もこねぇ？」
そんなに親しくもないクラスメイト…名前は忘れた。そいつが話しかけてきた。宮校というのは俺が通う高校のすぐ近くにある女子高だ。

「いや、俺は、家で妹が待って…」
反射的にそう断ろうとして、口を噤む。俺はいままで一度も学生らしい『遊び』というものをしたことは無かった。平日は瑠佳が学校から帰ってきていて、家に一人にするのも心配だし、休日は休日で家事やなんやで忙しい。だから俺は少しクラスで浮いていることが多かった。
でも、それは苦では無かった。瑠佳の将来を考えれば当たり前のことだし、そのことが理由で、俺がクラスメイトからハブられることはなかった。そんなに馬鹿らしい幼稚なことをする連中はいない。

「どうした？行くのか？」
もう、家で待っていてくれる妹はいない。俺は自嘲気味に笑って答える。
「いいよ。行く」
「マジか！！やった」
「俺、そういうのよくわかんねぇけど」
「いいよ。お前はビジュアル担当だから。じゃ、また後でな」
「ああ」
クラスメイトが走って帰っていくと、背後から声をかけられた。

「いくの？」
「ん？実沙希…」
実沙希は友達を先に行かせると、俺に詰め寄った。
「無理、してるんじゃない？本当なら学校くるのだってキツいんでしょ？」
「別に」
本当はここ数日、というか、あの日からずっと、まともに寝ていない。
「別に。何？」
「別に。ちょっと気晴らしだよ」
「…拓哉、変わったね」
「…」
俺は何も言わずに歩き出す。
「復讐だけが、全てじゃないよ？」
「…分かってる」

＋＋＋＋＋

「そうだ。こいつは俺の知り合いの楠木拓哉。どう？カッコイイでしょ」
俺は自分の話題に反応して、飲んでいた飲み物から顔を上げる。
「わぁー。石井クンの知り合いにこんなイケメン君がいたなんて。拓哉君、よろしくねー」
向かい側に座っている宮高生が俺に話しかける。俺は軽く会釈する。
今、俺の周りには数人の男女が座っている。一人はさっきのクラスメイト。他は全く知らない人ばかりだった。
「歌っちゃいまーす」

「カッコいーよ！！」
「ヒューヒュー」
「…」
周りのテンションが次第にあがっていくにつれて、俺は少しずつ冷めてきた。なんだか、場違いな気がする。…正直、アホらしい。

例のクラスメイト、石井が歌い終わると、俺は静かに席を立った。
「ごめん。やっぱ俺帰るわ。用事思い出した」
「えー。帰っちゃうのぉー？」
「まぁまぁ。俺がいるからいいじゃないか」
「ビジュアル不足だよー」
俺は石井にもう一度謝ると、石井は笑って首を振った。
「いいって。無理言って頼んだの俺だし。気にすんな」
「ほんっと、ごめん」
そう言って俺は、逃げるようにそこを後にした。

＋＋＋＋＋

高校生の『遊び』なんて、たいして面白いものでもなかった。これだったら、瑠佳と遊んでやってるほうが楽しい。
「違う」
あの日からもう一ヶ月も経とうとしていた。それなのに、瑠佳の影が頭から離れない。薄れるどころかどんどんと濃くなっていく。

「お兄ちゃん！！」
「…？」
気づけば小さな女の子が、しきりに俺の袖を掴んでいた。
「ねぇ、お兄ちゃんってば！！」
「どうしたの？」

女の子の背の高さに合わせてしゃがむ。くりくりとした大きな目が特徴的な、可愛い子だ。
「ボールがね、あそこの木の上に引っかかっちゃって…」
見ると、近くに大きな建物があって、女の子が指をさしている先は、その敷地内の木だった。確かにボールが挟まっていて、まわりに子供たちが集まっていた。
「ん…ちょっと待ってて」
俺はフェンスをまたぐと、腕を伸ばしてボールを取ってやる。
「ほら」
「わぁっ。ありがとう！！お兄ちゃん！！」
俺がボールを手渡すと、女の子は元気に礼を言った。
「お兄ちゃん、か…。そうだ、君は、どこの子なの？」
「ん？ここだよ」
女の子が指差す先は、さっきの建物。玄関には『しらゆり園』と書かれていた。

「しらゆり…園？」
小学生ぐらいの子もいるし、幼稚園ではないだろう。
「あ！！す、すみません！！」
建物の中から、若い女の人が走ってくる。
「あ、いや、気にしないでください。この子のお母さんですか？」
女の人にそう問いかけると、困ったように笑った。
「お母さん、というか。この子達みんなの親代わりですかね」
「はぁ、親代わり…じゃあここは…」
「身寄りのない子たちが、共同で生活をしているんです」
女の人は、少し寂しそうに笑った。
「ここにいる子達は、みんな親に捨てられて…」
「そうなんですか…」
俺が少し見てくるというと、女の人は優しく笑った。

「ふふっ。子供、好きなんですね」
「まぁ、はい。でも、なんでですか？」
「いいえ。ただ、お兄さんが子供達を見る目、とっても優しいから」
女の人はまぶしそうに目を細める。
「この子達は、私には絶対に分からない影を背負ってる。当たり前の家族が、この子達にはないんです。…お兄さんのご家族は、きっと優しい人たちなんでしょうね」
「…妹がいるんです。俺の家族は、その子だけで。とっても、優しい子なんです」
「まぁ…。じゃあ、兄妹二人で？」
「父さんは妹が生まれる前に死んで。母さんは、出て行きました」
子供たちの後姿を眺める。その景色はしだいに滲んで、夕焼けに墨絵のように広がった。
「ココの子達と、似ています…」
「すみません。会ったばかりなのに、こんな話」
「いいんです。…また、来てもらえますか？今度は子供たちと遊んであげてください」
「はい。もちろんです」
俺は笑って答えた。この女性（ひと）には、瑠佳が殺されたことは言わないでおこう。言ってもどうにもならないし、この人の中で瑠佳が生きているなら、なんだかうれしい。

それに俺自身、まだ瑠佳が死んだということがいまいち理解できていなかった。だからつい、『妹』の話をしてしまったのだと思う。
「お兄ちゃん、またね！！」
「今度はアカネちゃんとばっかりお話しないで、一緒に遊ぼうね！！」
「バイバーイ」
帰路に着いた俺の背中に、子供たちの声が追いかけてくる。

「おう、じゃあな！！」
俺も大きく手を振って答える。アカネちゃん、というのがさっきの女性（ひと）だということは、なんとなくだけど分かる気がした。
しらゆり園を出た俺の心は軽く、また足取りも軽かった。子供たちと触れ合えたことが、よかったのかもしれない。
俺は少しずつ、本当に少しずつだけど、瑠佳の死を、悲しみや憎しみという形ではなく、心で受け入れようとしていた。

「あ、すみませ…」
角を曲がったとき、人にぶつかって、反射的に謝る。でも、なかなか続く言葉は返ってこなかった。俺は不思議に思って振り返る。そこにいたのは…・
細くて、化粧っ気がなくて、やつれて不健康そうな女性。俺は驚きに立ち竦んだ。昔より、かなり痩せてやつれてはいるけど、この人は確かに…。
その女性は俺を見て、その場に泣き崩れた。

「あ…あ…あんたは…」
俺は女性を震える指で指差して、言った。
もう二度と、呼ぶことはないだろうと思っていた言葉を。

もう二度と、会うことはないだろうと思っていた人に。

「あんたは、母さん…？」

やせ細り、苦しそうに泣く姿は、それでもまぎれもなく俺の記憶の中の母さんだった。

家族　【2】

今、部屋の中には俺と母さんの二人がいた。
「…久しぶりね」
俺はできるだけ母さんをみないようにしながら麦茶をテーブルに置く。カチャ、と氷とコップがぶつかる音がした。
「拓哉、あなた大きくなった。それに、とっても大人っぽく…」
「４年も経つんだ。当たり前だろ？」
「そうね…」
母さんは随分と老けたように見える。歳のせいもあるだろうが、俺の記憶にある母さんはいつでも若々しく綺麗で明るかった。しかしそこには俺の知っている母さんはいなかった。体は痩せ細り、ほとんど骨と皮だ。頬がやつれて目が落ち窪んでいる。まるで骸骨のよう。

「この写真…この子が瑠佳？」
「ああ」
「大きくなった…」
まるで長年会ってなかった、甥っ子か姪っ子でも見たような口で言う母さんに、俺の怒りが募る。
「瑠佳は…まだ帰っていないの？」
「瑠佳は帰ってこない。…死んだ」
母さんは、写真を取り落とした。
「瑠佳が…死んだって…」
「…だから、来たんだと思ってた」
「そんな…知らなかった。…私、再婚するの…。だから今日は、一緒に暮らそうと思って…迎えにきたのに…」
迎えに来た？どの面下げて言ってやがる。俺はその台詞を、済んでのところで堪えた。どこまで分勝手なんだ。

母さんは変わってしまった。父さんが死んでから、ほとんど母親らしい姿を見せてくれなくなった。

＋＋＋＋＋

『…母さん、瑠佳が泣いてるんだ。なんでか、分からない』
『お腹でも減ったのよ』
母さんはソファーに寝たまま、俺のほうを振り返らずに言った。
『飲ませてあげて？』
『母さん疲れた。粉ミルクでも作って、あなたが飲ませてあげて。お兄ちゃんでしょ』
『う、うん。でも、作り方が…』
『…缶の横に書いてあるから。見ながら作りなさい』
俺はがっくりと肩を落とすと、泣き叫ぶ妹のため、台所へ走る。
本当は、瑠佳が泣いていた理由は分かっていた。粉ミルクの作り方も分かっていた。母さんに、優しい『母親』に戻って欲しかった。…父さんが死んでから、母さんはずっとあんな調子だったから。
『瑠佳ー。ほら、おいしい？』
俺が哺乳瓶に粉ミルクを溶かして、人肌に温めて持っていってやると、瑠佳はよろこんでキャッキャッと笑った。

『あーあ。もう飲んじゃったよ』
空になった哺乳瓶を横に置き、瑠佳を抱きなおす。すっかり泣き止んでご機嫌になった瑠佳は、さっきから俺の指を握ったり離したりしていた。
『ほら、にーにだよ。にーにって言ってごらん』
俺は瑠佳に顔を近づける。微かにミルクの匂いがした。
『んーあ。んーん？』
『にーに』

『んーに。んー』
『惜しいんだけどなぁ』
『んー？』
きょとんとした顔で見つめ返す瑠佳。俺はそっと、その頭を撫でた。くりくりとした大きな目。暖かくて、触れば壊れてしまいそうなほど小さな、俺のタカラモノ。
「母さんが守らないなら…俺が、守ってやるからな」
「んぁー」
小さなタカラモノは、キラキラと輝く笑顔を見せた。

＋＋＋＋＋

「母さん…知らなかった。瑠佳が…」
「なに言ってんの？」
俺は、優しく言った。このまま、母さんを励ましてやればいい。離れて暮らしてたんだから、しかたないよ。母さんは悪くないよって。

「あんたは母親なんかじゃない」
無理だ。この女に俺は優しくなんかできない。
コイツはほとんど瑠佳に愛情を向けてやらなかった。愛してはいただろう。大切には思っていただろう。でも、優しくしてやらなかった。母親の顔を見せてやらなかった。
「知らなかった…」
俺は立ち上がってまっすぐに睨む。
「教えようにも…あんた、俺に連絡先を知らせなかっただろ。それが、いまさらのこのこやってきて…」

「拓哉…」
怒りが腹の底から湧き上がってくる。森田に向ける怒りとは違う、誰にもぶつけることができなかった、四年分の怒りが。爆発する。
「ふざけんなよ！！俺たちが、今までどんな気持ちで生活してきたのか…瑠佳が…どんな気持ちで…ずっと…」
「本当に、最低なことをしたと思ってる。ごめんなさい…」
そう言う母さんの声は、震えていた。
「ごめんなさい？あの時、もしあんたが俺達の傍から離れなければ、瑠佳は死ななかったかもしれない。あんたがもし、瑠佳の近くにいたなら…」
詰(なじ)る。傷つける。
「あんたなんか、母親じゃない。母親だったら、俺達を捨てたりしないだろう！！俺達を…瑠佳を…まるで…まるでゴミみたいに…捨てたくせに！！」
俺の目から大粒の涙が流れる。声を出して泣く。悔しい。
俺は自分に嘘をついてきた。
母さんは俺達を捨てたわけじゃない。母さんは俺達のことを忘れて幸せになるべきだ、って。でも、違う。心のどこかで俺は、この女は俺達を捨てたんだ。自分だけ幸せになろうとしている、卑怯な奴なんだ、ってずっと思っていた。

俺の心は、四年前のあの日から全く成長なんてしていないんだ。
「だって、そうだろ？あんたにとって、俺たちはゴミでしかなかったんだ！！いきなり来て、母親ヅラして…一緒に暮らしましょう？もう手遅れなんだよ！！なんでわかんねぇんだよ！！なんで…」
俺はもう、壊れたんだ。
「なんで…それを…四年前に言ってくれなかったんだよ…」
四年前にそう言って、俺と瑠佳と三人で暮らしていれば…。

「帰れよ」
でも、もう手遅れなんだ。
「たく…」
「帰れよ！！」
俺は、母さんの手を振り払い、麦茶の入ったままのコップを投げつける。コップの中身が、容赦なく母さんの細い体に降りかかった。
「…あなたの気持ちを踏みにじったこと、ごめんなさい。もう、あなたの前には現れないから。でも、これだけは受け取って欲しいの」
「これ…」
目の前に差し出された、小さな封筒を俺は受け取る。
「写真…？」
「拓哉。最後に、あなたは私の子供だなんて思いたくもないだろうけど…。私の息子に生まれてきてくれて、ありがとう。…本当にごめんなさい」

母さんが、俺の前に現れることは二度と無かった。
残されたのは空のコップと、一枚の写真。

「この写真は…」
その写真は、俺と母さんと父さんの三人で写っている写真だった。それは一瞬、瑠佳が生まれる何年も前のものだと思ったが、違った。裏に、母さんの字でこう書いてあった。

『拓哉の、（甘えっ子）お兄ちゃん記念日。父さん・母さん・拓哉・るか』

「これは…」
俺の記憶の中で、一番幸せだった瞬間。唯一、俺の『家族』が全員揃った瞬間。

俺はその写真を写真たてに入れ、テーブルの上に飾った。テーブルの上には既に、父さんの写真、瑠佳の写真、俺と瑠佳で撮った写真が飾られている。横にはくまのぬいぐるみと、赤いランドセルが置いてあった。

「これで、いいんだ…」

きっとこれが、俺達『家族』のあるべき姿なのだから――

家族　【2】（後書き）

回想が多くてごめんなさい…。文章力が無いばっかりに…（T^T;）

家族　【3】

俺は今日、無断で学校を休んで家にいた。後で問いただされるだろうがどうでもいい。体が酷く重い。

昨日―あの後俺は、夜中になるまで特に目立ったことはしなかった。完全に母さんとは縁を切り、俺は一人になった。母さん(あの女)と繋がっているのもは、この俺の体に流れる血と父さんの楠木の姓だけだ。尤もあの女は再婚する気らしいから、楠木の姓は捨てるのだろう。俺達を捨てたときのように、ゴミのように。

「っ…」

家にいたら駄目だ。ここにいたら、もう憎みたくも無い人まで憎んでしまう。無意識に傷つけてしまう…。

そう思って俺は、家を出た。

それなりに活気のあるあたりにくると、俺は途端に後悔した。自分が学校をサボっていることを忘れていた。補導されるかもしれない。

「もう、帰るか…」

なんとなく帰りたくは無かった。かと言って、学校に行く気にはやはりなれなかった。

そのとき俺の脳裏に浮かんだのは、たくさんの子供たちと、優しく微笑む女性(ひと)。そう、『しらゆり園』。アカネさんは、学生ではないらしいからいるのかもしれない。ここからあまり遠くもないし、ためしに行ってみよう。

＋＋＋＋＋

「あっ。昨日のお兄さん。こんにちは」
「どうも、こんにちは」
案の定、アカネさんはいた。俺は微笑むと軽く会釈をする。子供たちは小学校や幼稚園に上がる前の子達が、元気に遊んでいる。
「あれ？お兄さん、学生さんじゃなかったんですか？昨日はたしか制服…」
学校に行くわけではなかったので、今日はジーパンにTシャツというラフな格好をしていた。
「えっと…振休なんです。振り替え休業」
「なるほど！！そうだったんですか」
アカネさんはポンと手を叩くと、優しく笑った。その笑顔が、罪悪感となって微かに俺の胸を締め付ける。

「あっ。すみません。私はこれで…」
「何か用事があるんですか？」
「ええ。ちょっと用事があるのでこれから出かけるのだけど…」
アカネさんはそう言って、近寄ってきた男の子の頭を困ったように撫でる。
「本当は、今日はこの子達と遊ぶ約束をしていたの」
「ねーえ。きょおは遊ばないの？」
「ごめんね。また今度、遊ぼうね」
男の子は悲しそうに俯く。
「…俺、この子達と遊んでましょうか？特にすることもなくて暇だし」
「本当ですか！！ありがとうございます。よかったね」
俺は腕捲りをして、男の子のほうへいく。男の子は不思議そうに顔を傾げたが、警戒はされていないみたいだ。
「よーし。今日は兄ちゃんが遊んでやるからな。名前はなんていうの？」
「ん、しゅん！！」

「おっ。カッコイイ名前だな。俺は拓哉。た・く・やだよ」
「たくあ？」
俺のそんな姿をアカネさんは見、笑った。
「じゃあ、お願いしますね。夕方までには戻ります」
「はい！！任せてください」
「ふふ。任せました。俊、お兄ちゃんにいっぱい遊んでもらってねー」
「うんっ」

俺はアカネさんを見送ると、俊の小さな体を楽々と担いだ。
「よーし。ほら、肩車」
「わあ！！すっごくたかーい！！」
「そうだろ？落っこちるなよ」
俊はキャッキャッとはしゃいで、俺の髪をぎゅっと掴む。
「痛たたた…ってん？」
気が付くと俺は、好奇心旺盛な子供たちに囲まれていた。
「おにいちゃん、だぁれ？」
「俺は…」
「このひとは、たくあ兄ちゃんだよ」
俊が俺にしがみついたまま、自慢げに言う。
「たくあおにいちゃん。だっこ！！」
「ぼくも！！」
子供達の中で、俺は『たくあ』と覚えられているらしい。本当は『たくや』なのだけど…別にいいか。
「わかった。わかった。順番な」

俺はその後（あと）、子供たちを順番に肩車をしたり、抱き上げてぐるぐると回してやったりした。子供達は、普段こんなにアクティブに遊んでもらってないのか、俺の想像以上に喜んでくれた。…のだけれど。

「ま…待った。げほっ…ちょ、休憩…」
「えー。もう終わりなのー？」
はりきりすぎたのか、それとも運動不足だからか、あっというまにスタミナ切れになってしまった。…不覚。それにしても…
「おにいちゃん、はやくー」
「だから…待ってってば…」
「はやくはやく！！」
どうしてこんなに子供は元気というか、タフというか。疲れているようには全然見えない。
「も…無理。限界…」
俺は走るのをやめ、草の上に寝転ぶ—もとい倒れこんだ。
こんなに元気な子達と毎日遊んでいるアカネさん達は、凄い。

「遊ぼ！！」
「兄ちゃんちょっと疲れ…ぐはっ。俊、腹の上に乗っかるな！！」
「わあ。おもしろそう！！」
「面白くな…わっ。だから乗るなって！！」
あっという間に俺は、子供達に上に乗られてしまった。痛くはないが、少し重い。
「ほらほらどけろ。いうこと聞かないやつは…こうだぞ！！」
「きゃああ！！くすぐったい！！」
「ははは！！」
俺の上からどけ—もとい転げ落ちた子供達は、俺の真似をして草の上に寝っころがる。よく、一緒に遊びに出かけたときに瑠佳ともこうして寝っ転がったっけ。そうして瑠佳は、決まってこう言う。
『ありがとう』

「…お前らは、今、幸せか？楽しいか？」
「しあわせ？」
首を傾げる俊の頭を、俺は優しく撫でる。

「まだ、分からないか」
「？でもね、たくあ兄ちゃんと遊ぶのは楽しい」
「そう…」
あともう少し大きくなったら、自分達がここで生活している意味を知るだろう。ここで自分達を育ててくれている人たちが、母親という存在や、父親という存在とは違うものだと。共に過ごしている仲間が、兄弟という存在ではないと気づくだろう。自分には『家族』という存在が欠けていると気づくだろう。
そのときに、この子達は今と同じように笑えるだろうか。無邪気なまま、笑顔で人を幸せにできるような子になれるだろうか。
お互いに助け合い、手を取り合って、笑顔で生きていけるだろうか。
「お前達なら、きっと大丈夫…」
俺は独り言のように呟く。
きっと、自分を捨てた両親のことを憎むだろう。それでも俺のようには腐らないで欲しい。たとえ何があってもまっすぐに進んで欲しい。

「たくあ兄ちゃん？」
不思議そうに俺を覗き込む俊。俺は笑って、その小さな頭をガシガシと撫でる。
「俊…」
「なぁに？」
「よしっ！！もう一遊びしてくるか！！」
俺が伸びをしてそう言うと、俊は目をパチクリさせ…
「うんっ」
最高の笑顔で頷いた。

何があっても、その笑顔を忘れるな――

家族　【4】

＋＋＋＋＋

「お帰りなさい」
俺は立ち上がって、微笑んだ。
「すいません。勝手に上がり込んじゃって」
「かまいませんよ。あれ、みんな寝ちゃったんですね」
「はい。はしゃいでたから、遊び疲れたんだと思います」
「ふふふ。お兄さんも、疲れたんじゃないですか？」
「ここの子供達は、みんな元気ですからね。流石に疲れます」
アカネさんはお疲れ様です。と笑うと、はっとしたように俺の顔を見た。
「どうかしましたか？」
「いえ…そういえば私、お兄さんの名前も聞いてなかったような…」
俺達は顔を見合わせると、お互いに吹き出した。そして、子供達が寝ていることを思い出してしーっと声を落とす。

「今更ですけど、私の名前は…」
「アカネさん、ですよね？」
アカネさんは首を傾げると、不思議そうな顔をした。俺は慌てて付け足す。
「この間、子供達が『アカネちゃん』って呼んでたので」
「ああ、なるほど」
納得したように頷くと、ポンと手を叩く。俺はそっと胸をなでおろした。…なんで緊張したのかわからないけど。
「改めまして…。宮野茜といいます」
「えーっと…」

これからは宮野さんと呼んだほうがいいのか、茜さんと呼んだほうがいいのか、戸惑う。それを察したように、茜さんは苦笑した。
「茜でいいですよ」
「俺は楠木拓哉です」
「じゃあ、私は楠木さんと呼ばせてもらいますね」
「あっ拓哉でいいです。堅苦しいですし」
茜さんのほうが年上だと思うし。と付け足すが、茜さんは首を振った。
「いいえ。楠木さんって呼ばせてもらいます。どうしても嫌ならいですけど…」
「嫌ってわけじゃないですけど…」
「んー。でもやっぱり、楠木さんよりもお兄さんのほうが呼びやすいかもです」
茜さんはそういって、悪戯が成功した子供のような顔をする。
「改めてよろしくです。楠木さん」
「い、いや…こちらこそです。茜さん」
俺達はそう言って、なんだかむず痒い気持ちになって笑った。

「ふふ…やっと笑った」
「え？俺笑ってませんでした？」
茜さんや、子供達の前では結構笑っていた記憶がある。
「あ、いや、笑ってはいたんですけど…なんとなく、影があるような気がして。それが今のは、高校生らしい、無邪気っていうか、子供っぽいっていうか…」
「子供っぽいですか」
「あ！！ごめんなさい。…怒っちゃいました？」
そう言って顔の前で手を合わせる茜さん。年上なのに、なんだか頼りないっていうか。
「ははは。別に怒ってませんよ。子供っぽいなんて言われたことなかったので」

「そうなんですか？」
「はい。むしろ大人びてるっていうか、無駄に大人っぽすぎるって言われることばっかりですね」
昔から、何もかも完璧でどこにも穴がない、『大人すぎる、どこか悟った子』だった俺。『子供っぽい』なんて一度も言われたことは無かった。
「そうですか？私は二回会っただけで、結構子供っぽいとこ発見しちゃったりしたんですけど」
「どんなところですか？」
「それは…秘密です」
き、気になる。
「な、なんで秘密なんですか？」
「なんで秘密かなんて、秘密だから秘密なんですよ」
「茜さんのほうが、子供っぽいと思います…」
「ふふふ」
二回会っただけだけど、なんだか読めない人だ。…天然？

「う…ん…」
「あ、起きちゃったかな」
茜さんが屈むと、俊が布団から這い出してきた。
「ん…あかねちゃん？帰ってきたの？」
俊は手を伸ばして、無邪気に茜さんにだっこを求めた。茜さんは優しく抱き上げ、髪を撫でる。
「楠木さん…拓哉お兄ちゃんと、何してあそんだの？」
「たくあ兄ちゃんの、肩車が高かったの…」
「そっか。怖くなかった？」
「こわくなんか…ふぁ・・」
茜さんがそっと尋ねると、俊は大きな欠伸をした。
「まだ、寝てもいいよ？」
「ううん…たくあ兄ちゃん…」

「どうした？」
「いっしょに遊んでくれて…ありがとう」
眠そうな目をこすりながら、笑顔の俊が言った。そのまま、俊は茜さんの腕の中でもう一度深い眠りについた。

「また寝ちゃいましたね」
「子供は、遊びと寝るのが仕事ですから」
他の子を起こさないように気をつけながら、茜さんは優しい手つきで俊を布団に戻す。
「ありがとう、だって…」
「男の人が少ないから、ああいう風に肩車とかで遊んでもらえることってないんです。嬉しかったんでしょうね。歳の離れたお兄ちゃんができたみたいで」
「そうだと、嬉しいです…。こんどはまた、休日にでもきますね」
休日なら、他にも子供がいっぱいいるだろう。俺にできることといえば、その子達と遊んであげることぐらいだろうから。
「あれ、もう帰っちゃうんですか？夕ご飯ぐらい、ご馳走しようとおもったのに」
「気にしないでください。それに、他にもたくさん子供たちが帰ってきて大変でしょう？」
「そうですか…。ちょっぴり残念です」
本当ならご馳走になりたいが、迷惑になるわけにはいかない。
「また、すぐにきます。子供達によろしく」
「はい、また。さようなら」
「さようなら」
そう言って、しらゆり園を後にする。手を振った俺に、手を振り返してくれた茜さんは、やっぱり笑顔だった。
空は、輝くような夕焼けに染まっていた。

＋＋＋＋＋

「…」
俺は首の後ろで手を組み、家へと向かう道を歩く。それなりに広い道なのだが、辺りには人の姿は見えない。体に軽い疲労感はあったが、それもまた心地いい。どうせ暇なんだ。来週も行ってみよう。

「あ、すみません」
「…」
前から歩いてくる男と肩がぶつかって、俺は反射的に謝る。しかし男は何も発しない。男は立ち止まると、訝しげに俺を見た。俺はそれを無視して先に進もうとするがそれを男が遮る。俺が右に行けば右に、左に行けば左に。
「あの、何ですか？」
俺も次第に苛立ち男にそう問いかける。男はちら、と俺の顔を覗き込むと、グッと顔を近づける。白いというより青白いに近い顔色と、蛇のように鋭く細い目。
「くくく…」
そして、笑った。俺の肌が粟立つ。
「あの…」
「くくく…お兄ちゃん…？」
思考が停止した。こいつ、今なんて…？
「お兄ちゃん、逃げて…。そう言ってたよ。くくく。瑠佳ちゃんだっけ…。本当にお兄ちゃんが大好きなんだね」
「っ…！！」
「殺す気はなかったんだよ…。ついておいで、って言っても、ついてこなかったんだ。お兄ちゃんがどうなってもいいの？って聞いたら、飛び掛ってきたから、ね？」
「き…さま…」
俺は気づけば男―瑠佳を殺した犯人、森田に襲い掛かっていた。森田は抵抗もせず、されるがまま地面に押し倒された。

「お前…俺たちの何を知ってんだ？」
「楠木拓哉。高校三年、１１月１６日生まれの１７歳。小学生の頃に父が他界。その後、母に捨てられ、いままで幼い妹、楠木瑠佳と二人で過ごしてきた。妹が森田慎司―おっと、僕か。に殺された後は天涯孤独となり…」
森田が、まるで国語の教科書でも読み上げるようにすらすらと述べる。俺の背中を冷や汗が伝った。この男、俺たちの何もかもを知っている。
「ちなみに楠木瑠佳は、小学一年、８月２０日生まれの７歳。両親の顔も曖昧にしか覚えておらず、歳の離れた兄と二人で暮らしてきた。もっとも、７歳の誕生日に殺され、帰らぬ人に…」
「やめろ」
「あれ、怒っちゃった？ちょっとお喋りが過ぎちゃったかな」
「やめろって…言ってんだろうが…」
再び俺の心を、憎しみが支配する。この男が、瑠佳を殺したんだ。コロシタンダ―。この男が、憎い。ニクイ、ニクイ、ニクイニクイニクイニクイ―。
「ヴ…ァァァアアアアア！！！」
今、何も凶器になるような物は持っていない。なら、この拳でやるしかない。殺ルシカ――。
「まいったな。ほら怒らないでよ。お兄…」
「死ね。死ネェエエエエエエ！！」
「まったく。面倒な」
森田は俺の拳をいとも簡単に片手で受け止めると、起き上がって俺の前に立った。
俺は狂ったように暴れ、『死ね』『殺す』と叫びながら、森田に飛び掛る。森田はそれを蛇のように細い目で睨み…。
「うっ…ごほっ」

一瞬の間の後、勝負を制したのは森田だった。俺は、何がなんだか分からないまま地面に倒されていた。森田が強く俺の胸を踏みつける。
「…っ！！」
「やっぱりか…。まだ、傷口が塞がってないんだろう？」
「いっ…」
抉るように、何度も、何度も。俺の傷を踏みつける。俺の着ていたTシャツには、いつの間にか血が染みてきていた。

「ぐっ…お前を…殺して…」
「君が僕を？どうして？」
「お前は…瑠佳を…」
俺が苦し紛れに言うと、森田は更に勢いよく俺の傷を踏みつけた。鋭い痛みが胸だけでなく、全身を駆け抜ける。
「殺した…？くくく。そうか…僕は、君の妹を殺したんだな…」
「死ね…」
「くくく…。はははははは！！！」
森田は高笑いをすると、俺の胸から足をどけた。俺はすかさず立ち上がる。血がボタボタと地面に落ちた。
「楠木…いい、いいよ！！君は、僕の想像以上だ…。でも、まだ足りない。もっと、もっと憎め。もっと醜く、もっと壊れるといい…」
「森…田…」
「まだ、足りない…。君が僕の理想になるまでには、もっと『生け贄』が必要だね。…次に会うときまで、考えてくるよ」
じゅるり、と森田が舌なめずりをした。
「楠木。また君に会えるときを、楽しみにしているよ…。くくく」
「ま…て…」

俺は、去っていく森田の後ろ姿を見送ることしかできなかった。

森田の高笑いが、まだ耳の奥にこびり付いている気がした。

そして俺は気を失い、緩やかに闇に呑まれていった…。

番外編　だんらん

ガチャ、とドアが開く音がする。ついで聞こえてくる『ただいま～』という元気な声。
「・・・母さん！！赤ちゃん、どう？動いた？男？女？名前は、決まった？」
「ちょっとちょっと、拓哉。一度にたくさん質問されても母さん答えられないわ」
そう言うと、ランドセルを投げ捨てた息子を注意する。
「まったく、せっかちなんだから。でもねまだ赤ちゃんは動かないの」
「なんでー？」
「んー。まだ、それぐらいになるまで成長してないからかな」
「じゃあさ、男？女？」
「残念。それもまだわかんないんだな」
「えぇー」
そう言ってしょげる拓哉の頭の上に、大きな手が置かれる。
「まぁまぁ。そう焦るなって。そんなにすぐ分かってもつまんないだろう？」
「わぁ、父さん帰ってきてたの？」
「ああ。母さんが大変だろうからな」
大きな手の主は、そういって息子の髪をくしゃくしゃにした。
「じっくり待とう。じっくりな」
「そう言って真っ先にベビー服買ってきたの、どこの誰だったかしら？」
「さぁ？貴方の旦那様だったような気がしますけど？」
最近のこの家の中心は、私―ではなくて、私のお腹に宿る、新しい命。拓哉にとっては、１０歳以上も年が離れた弟か妹だ。

「拓哉が、お兄ちゃんかぁ…」
この甘えっ子が、お兄ちゃんかと思うとなんだか不思議な感じがする。父さんに習って、私も甘えっ子ちゃんの頭をくしゃくしゃに撫でる。
「わわっ。母さんまで。やめろって」
「んー？いいじゃない。おにーちゃん」
「お、おにーちゃんって…」
ふと、拓哉が私のお腹を見る。まだ全然大きくはないけど、たしかに命が宿っているお腹を。

「拓哉が、兄貴ねぇ…」
父さんはうなづき、さっきの私と似たようなことを口にする。
「この甘えっ子が！！」
確かに拓哉はずっと一人っ子で、デレデレに甘えっ子だった。だから、それが突然ピシッとしたお兄ちゃんになるとおもうと、なんだかむず痒い。
「拓哉は、弟と妹、どっちがいいの？」
「俺？俺はねぇ…」
まじめに考える拓哉。それを見守る父さんと私。こういうのを、幸せっていうんだろうか。
「うーん。弟だったら、一緒にサッカーとかもできるしなぁ…んーでも」
「でも？」
「でも、やっぱり妹がいいかな。女の子はやっぱり特別に可愛いし」
そして、とびっきりの笑顔を見せる。
「男の子でも、女の子でも。どっちでも父さんと母さんの特別な子供だっていうのには変わりないよー」
そう言って、拓哉を抱きしめる。急いで帰ってきたのか、うっすらと汗をかいている。
「うふふ。可愛いー」

「ちょ…やめろって。ハズいじゃん」
「やだー」
「やだーじゃなくて！！」
「おっ。父さんだけ除け者にするなよー。まぜてよー」
そう言って父さんまで抱きつく。
「うわっ。やめろっ。暑苦しい！！」
「やだー」
「だからやだーじゃなくて！！」
今度は私を除けて、男同士でじゃれあう。

このにぎやかな楠木家に、もう一人、小さくて元気な、赤ちゃんが…。
「女の子だったら、華やかになるかなぁ…。男の子だったら、もっとにぎやかに…。そして、母さんを、男三人で守ってくれるのかなぁ…」
ひとり言のようにそう呟くと、拓哉が振り向いた。
「母さん！！赤ちゃんの名前、俺が決めていい？」
「んー。でも、まだ女の子か男の子か分からないのよ？」
「じゃあ、男でも女でも大丈夫な名前にすればいいじゃん。海とか、空とか。」
「父さんも混ぜろよー」
「父さんは駄目だ」
「なんでだよー」
「父さんはネーミングセンスが無さ過ぎる」
そういえば、昔飼っていた金魚に変な名前をつけられて、拓哉、怒っていたっけ。たしか、漢字何文字かだったきがするけど…。
「南国西瓜売り？あれは昔の話だよ」
「南国…西瓜売り？それは本当に金魚なんでしょうか」
「え？なんか言った？」
「…ううん」

…今の、聞かなかったことにしようかしら。父さんのセンスは、無いというよりむしろ…。

「よし、決まった！！」
「おっ、まってました！！」
「もしかしたら父さんのセンスを受け継いでいるのかもしれないわね…」

「それでは、発表します…」
「ダダダダーン、ダンッ」
「じゃーん。『るか』ってどう？」
「おぉー！！」
「可愛い名前ね。ルカって、外人さんみたいね。どうして？」
ゲームか、漫画とかから取ったのかな。と頭の隅で思う。
「それはね…」
拓哉は紙とペンを取り出すと、それにすらすらと書いていく。
「楠木守の『る』と楠木佳織の『か』で『るか』だよ」
平仮名で書いた、まもるの『る』とかおりの『か』に丸をつけ、二つを結ぶ。
「おぉー。よく考えたな。すごいぞ」
「父さんの遺伝子は受け継がれていなかったようね。そうだ、拓哉はなくてもいいの？」
「ううん。これでいいの。だって…」
拓哉は少し照れたように私のほうを向く。
「だって、俺も、父さんと母さんに『拓哉』って名前を貰ったから。俺はこの子に父さんと母さんから取った、『るか』って名前を付けるんだよ。…お兄ちゃん、だから」

拓哉の言いたいことは分かった。ただの甘えっ子から、甘えっ子お兄ちゃんに昇格かな。

「るかは俺の妹だから、只者じゃねぇぞ」
「あらあら。母さんの娘だから絶世の美女よ」
「ふふん。父さんの息子だからな、超絶美男子だぞ」
それぞれに思い思いのことを口にする。…考えていることは同じだけど。
「よーし。記念写真撮るぞ。記念写真」
「最近、父さん毎日記念写真撮るよね」
「父さんにとっては、この家族で過ごす毎日が、記念日なんだから」
「うふふ。父さん、珍しく詩人ね」
「セルフタイマーだセルフタイマー。いそげー」
「急ぐの父さんだけだよー」
私と拓哉がピースをして、父さんがスライディングをして、ギリギリ入る。
るかが生まれたら、こうやって、またみんなでドタバタと記念写真を撮るんだろうな。今から、楽しみ。

＋＋＋＋＋

『拓哉の、（甘えっ子）お兄ちゃん記念日。父さん・母さん・拓哉・るか』
私はやきあがった写真の裏に、そう書く。

そして、『家族の記念写真』と書かれた大きなアルバムの一番後ろに、その写真を閉じる。アルバムの中には、拓哉が生まれたときの写真や、幼稚園の入園式と卒園式。小学校の入学式のときの写真に、誕生日。家族旅行のときの写真なんかがたくさん閉じられている。
元々は父さんが写真を撮るのが好きで、なにか家族で節目があるごとに写真を撮っていた。恥ずかしいけどそれはとっても素敵なこ

とだから、少し気が早いけど、もし拓哉やるかが大人になって、それぞれの家庭を築いたらこの習慣を引き継いで欲しいと思う。

私は微笑んで、アルバムを抱きしめる。ささやかな願いを胸に。

これからもずっと四人で、幸せの写真を重ねられますように…・。

第三章　森田慎司　【1】

「っつ…・森田の情報をっ…今すぐ教えてください！！」
「拓哉君！？君は病院のはずじゃ…」
「そんなことはどうでもいいんです！！今分かっていることだけでいいんで、教えてください！！」
俺は一気にそう言い切って、肩で大きく深呼吸をする。額を汗の玉が伝った。警察所(ここ)までまで全力疾走してきたのだ。俺が今着ているのはいつもの普段着や制服では無く、真っ白な、病院で病人がベッドで寝るときに着ているような服だ。尤も、俺は今病院から走ってきたのだが。
「君が知りたがるのも分かる。でも、こればっかりは…。無理して傷が開いたんだって？」
「俺の身体のことは、大丈夫です。だから…！！」
「…森田のことについては、警察も総力を挙げて調査している。拓哉君、君が今すべきことは、落ち着くことだ」
落ち着いてなんかいられるかよ。と心の中で警官に悪態をつく。
俺はあの後病院へ運ばれ、傷と疲労で三日間眠り続けたらしい。瑠佳が死んでからまともに寝てもいなかったから。
「あれから随分時間が経った！！流石の能無しの警察だって、少しぐらい情報を掴んでいるんだろう！！」
「私のことを能無しと罵倒するのはかまわない。ただ、寝る間も惜しんで調査してくれている他のみんなの事を、能無しというのはやめて欲しい」
とりあえず落ち着いてくれ。と警官は俺を椅子に座らせ、自分も脇に座る。そういえばこの警官は、いつも俺の相手をする。俺に電話をしたのも、説明をしたのも、俺が暴れて首に飛びついたのもこの警官だった。

「…取り乱して、すいません」
俺が俯いてそう謝ると、警官はにこやかに笑った。
「大丈夫だよ。落ち着いたかい？」
「はい。…すいません。俺、最近おかしいんです。自分で自分のコントロールができないっていうか…。気付いたら、自分でも訳の分からない行動をしていて…。その度に、周りに迷惑をかけてしまって。もう、どうしたらいいのか…」
俺は自分で自分の顔を覆う。たまに感情が暴走することがあった。自分で制御できない…というより、自分はもしかしたら制御しようともしていないのだろうか。
「俺…変、ですか？病院行ったほうがいいんですか…？」
「君は変なんかじゃないよ。ただ、かけがえの無い人を失って、心が傷ついただけ。そうだろう？」
警官の顔を見ずに、コクコクと頷く。それ以上に、何を話したらいいのか分からなかった。
「きっと、君の傷はそう簡単には癒えない。心の傷も、君が瑠佳ちゃんの影を追って付けた傷も」
「…はい」
俺はそっと、胸の傷に触れる。ちくりと痛んだ。子供たちと遊んでいたときには全く痛まなかったのに。
それはきっと、森田が俺の傷を抉るような真似をしたから。身体的にも、精神的にも。屈辱。痛み。敗北感。憎悪。俺は森田に対して手も足も出なかった。飄々とした態度に戸惑うだけで、何もできなかった。悔しい…。

「俺、森田に会いました」
「なに？」
「なぜ警察は、森田（あれ）を釈放したんですか？彼が瑠佳を殺したことは間違いないんでしょう？」
「それは…」

警官はうろたえ、視線を落とした。
「仕方が無かったんだ。いくら調べても、『森田慎司』は三ヶ月前に間違いなく死んでいる。家族も認知済みだ。身分証から、森田本人だというのも分かる」
「でも…っ」
「事実上『死んだ』とされている者を、署に留めておくには限界がある。納得はいかないが、それだけだ。分かるね？」
俺は奥歯を噛み締めた。でも、俺は間違いなくあいつと会っている。
「あいつ…俺達の全てを知っていました。両親がいないことも、その詳細も、誕生日まで…」
「以前、森田にあったことは？家族ぐるみの付き合いをしていたとか…」
俺は黙って首を振る。それを見て警官はため息をついた。
「…本当に何か分かっていることはないんですか？」
警官はきまり悪そうに目を泳がせる。
「俺…」
「分かった。君には知る権利がある。私が交渉してこよう」
警官が立ち上がり、おそらくこの事件の代表だろう男に声を掛けた。俺はちらとそちらを見ると、そのまま膝に頭を埋める。俺は、あの人を利用する。そう思うと、罪悪感がこみあげてきた。そしてそんな自分に嫌悪感がつのる。
「拓哉君、許可が降りた。別室で…拓哉君？」
「あ…。すみません」
大丈夫か。と聞いてくる警官に返事を返し、立ち上がる。
「ここを行った先に、情報が保管されている部屋があるんだが…」
「はい」
警官の声が、どこか遠くに聞こえた。

＋＋＋＋＋

「あの…えっと」

名前が分からないため、なんと呼んでいいのか。警官さん、と呼ぶのは失礼な気がする。

「ん？ああ。名前は初めて会ったときに伝えておいたはずなんだが…。君は混乱していたし無理も無い。私は桐嶋。こう見えても刑事なんだよ」

「刑事…」

「まあ警官でも刑事でも、そんなにたいした違いは無いんだけどね」

先程から、思考を読まれている気がする。刑事だっていうから、洞察力が高いんだろうか。

「刑事さんには、見えなかったかい？」

そう言って警官―桐嶋さんが苦笑する。俺は椅子に座ったまま、居心地が悪くて首を傾げた。俺が今いるのは、刑事ドラマなんかでよく見る、取調べ室のようなところだった。本当の取調室がどんなだかは知らないが。

「…と、これが、森田の情報だ」

桐嶋さんが立ち並ぶ本棚から、比較的薄いファイルを取り出した。閉じられている紙の量もそんなに多くはない。

めくると、そこには森田の顔写真がでかでかと印刷されていた。きっと、免許証か何かの写真なのだろう。俺が会ったときよりも幾分か若く見えた。相変わらず肌が青白かったが、口元にはあの薄気味悪い笑みはなく、無表情だった。

「拓哉君、会ったのは本当にコイツかい？」

「ええ。一度会ったら忘れませんよ」

「そうか」

森田の顔写真をもう一度まじまじと見ると、下に書かれている文

章へと移る。
「『森田慎司。未婚。数年前に一度結婚しているが、すぐに離縁。実家に父、母、妹』か…」
一言一句、声に出して読んでいると、その下に興味深いことが記されていた。
「『故人。当時２８歳。５月１８日、某橋の上からの飛び降り自殺と見られる。雨で増水した川の水で溺れ、水死。下流まで流されたところを、釣りに来ていた中学生数名に発見される。』」
その下に、手書きで『楠木瑠佳（当時７歳）を刺し殺したとして現在調査中。』
「桐嶋さん…」
俺が振り返ると、桐嶋さんの手の中から何かがゴト、と音を立てて落ちた。

第三章　森田慎司　【1】（後書き）

お盆休みでぼーっとしていたらこんなに・・・ごめんなさい

森田慎司　【2】（前書き）

学校が始まってしまい、更新する時間が無い・・・。少しゆっくりめなペースで進めたいと思います。

森田慎司　【2】

「録音ですか」
俺は足元に落ちたそれを拾い上げる。落ちた衝撃で壊れていた。
「あ、いや…。念のためだよ。嫌だったかい？」
「嫌じゃないですよ。別に」
と言って笑い、録音機を古い机の上に置く。置き方が悪かったせいか、ぐらぐらと揺れた後、またしても床の上に落ちてしまった。俺は再び屈んで拾い上げ、笑みを浮かべたまま桐嶋さんに手渡す。

「俺が暴れて、…うっかり何かを話すとでも思ったんですか？」
その言葉に、録音機を受け取ろうと手を伸ばしていた桐嶋さんの手がピクリと止まる。
「何も話しませんよ。…そもそも話すようなことなんかありませんし」
「…そんなつもりはないよ」
俺はその言葉に嘲るような笑みで返した。
「貴方が俺を見る目は、いつも変だった」
哀れみのような、それでいて恐怖のような。この人はそれなりの歳で、いろんな事件にかかわってきた。だから俺のようになった遺族をたくさん目にしてきたはずだ。
悲しみに暮れ、ただ呆然と犯人の逮捕を願う者もいれば、壊れたように暴れる者もいただろう。
そして俺は後者。そのことを、この人は会った瞬間からそれを分かっていた。

「見張るつもりだったんでしょう？」
「…」
「俺が、大それたことをしないように」

きっと暴れた人たちは、何よりも犯人の死を望んだだろう。
いや、死よりも酷い結末を。犯人が死をもって自分の犯した罪を償い、終わるような物語は望まない。そう簡単に、楽には死なせない。ズタズタに、それこそ身も心もズタズタにした挙句生かす。何もかも奪い、奪われ、そして自らも闇の底へ堕ちていく。地獄の果てまでついていき、永遠に復讐を繰り返す。―それが俺の理想。
「無駄ですよ」
目には目を。歯には歯を。なんて、甘い。片目を潰されたなら顔の全てを。歯を抜かれたなら体中の骨を。大切な人の命を奪われたのなら、大切な人の命を奪いつくす。
そこに犯罪という概念はない。ただ憎しみが動かす本能に従うだけ。
「見張ったって、無駄です」
桐嶋さんは俺の顔をちら、と見ると黙って俺の手から録音機を受け取った。そこに先程までの笑顔は無い。
「見張る、なんて一言も言っていないよ」
目の前に桐嶋さんが立つ。口調は相変わらず優しいのに、言い表せない威圧感がそこにはあった。俺は気付かれないように唾を飲む。
「半分は当たっているけどね」
「半分？」
「『楠木拓哉を週に三日監視しろ』それが私の役目だよ。不本意ながら」
『見張る』じゃなくて『監視』。
「ははは。好きにしてくださいよ」
目の前にある厳つい顔に、自分の顔をぐっと近づける。
「俺は、逃げも隠れもしませんから」
この人が監視しているから何なんだ。関係ない。俺は、俺のしたい事をするだけ。
「君は、普段通り生活してもらってかまわない。私も極力妨げにな

らないようにするから」
普段通り、ねぇ…。
「それって、俺の家の中まで入ってくるんですか？」
「いや、さすがにそこまでは…」
「じゃあ、家の外から見張る…じゃない『監視』するんですね？」
「まぁ、そうだ」
「困るんですよねぇ。俺の家アパートだし、ご近所さんとかもいるわけですし。アヤシイ人がうろついてたら、警察に通報されちゃいますよ？」
そう言って顔を放すと桐嶋さんは僅かにうろたえた。
「冗談ですよ。別に人通りの少ない小さなアパートですから。大丈夫です」
最寄り駅からも遠く、近くにコンビニすらなく、たいした店も無い。そんなところに住む奴なんかよほど金がないか変わり者か。
入居してる人なんてほんとにちょっとしかいませんから。と俺が笑うと、桐嶋さんは眉間にしわを寄せた。
「私は、君が何を言っているのか分からない」
「俺が話してんのは日本語ですよ」
「…君は先程『困る』と言った。しかし今君は『大丈夫』と言った」
「別に、深い意味は無いですよ」
桐嶋さんはそうかといいながらも、眉間のしわを深くした。別に、どうだっていいんだ。近所のこ
となんか。
森田の情報を手にして、いままで俺の頭の中で練り上げてきた計画が一気に形作られる。森田相手ではできない所を取り除き、逆に新しく浮かんだものを更に練る。これなら、殺れる。心臓が高鳴った。この計画なら森田を地獄に叩き落し、絶望させられる。そして、俺も…。

殺レル。

「復讐はやめておいたほうがいい」

俺の眼が憎しみと喜びに染まったとき、計ったように隣から声が聞こえた。妙に悲しげな、苦しげな声が。

「桐嶋さん？」

「きっと、後悔する」

そう言う桐嶋さんの顔は、やはり声と同じく悲しそうに歪んでいた。

「復讐（そんなこと）したって無意味だ。君はまだ誰も殺めていない。まだ間に合う」

ざわ、と全身の毛が逆立つのが分かった。

「あなたに、俺の気持ちが分かりますか」

「分かる」

「分かるわけ…ないでしょう」

悲しみが、喜びに。喜びが、絶望に。そして、憎しみに。

また、俺の中で何かが暴れだした。制圧することのできないアレが。俺の感情を支配して、暴れさせる…。俺はそれに身を任せた。

悲シミモニクシミモ喜ビモ。全テヲニヌリツブシテ…。

「あんたに…」

「落ち着いて」

「あんたに俺の気持ちが分かってたまるか！！」

俺が掴みかかっても、桐嶋さんは無表情を崩そうとはしなかった。ただ落ち着け、と言うばかり。その反応が俺の神経を逆なでする。苛つく。

「瑠佳の気持ちが分かるか…。瑠佳がどんな気持ちで死んでいったか！！」

パァン！！

空気を乾いた音が揺らした。同時に左頬に走る痛み。俺の体は地

面に転がった。
「…死んだ人間は何も語らない。何も思わない」
「っ…。てめぇ」
「死んだ人間に感情はない。瑠佳ちゃんは、悲しくも苦しくも寂しくも…憎くも無いんだ。彼女は、死んでいるから」
俺は冷たい床に転がったまま目の前に立つ男を睨みつける。なぜ俺は、この男に殴られたのだろう。
「死んだ死んだって…殺したのは森田だろう！！」
「そうだよ」
「瑠佳が…瑠佳がどんだけ苦しんで死んだと思ってんだよ！！悲しくて、苦しくて、寂しくて…どんだけ憎いか！！」
桐嶋さんは突然俺の胸倉を掴むとそのまま床に叩き付けた。
「それは瑠佳ちゃんの気持ちじゃない！！森田が憎くて憎くてたまらないのは拓哉君、君だろう！！」
「っ…！！」
「言っただろう？君の気持ちが分かるって。君の、その歪んだ憎しみの感情が分かるって！！」
背中に走る鈍い痛みと、動揺。
「私も…私も殺されたんだ！！君と同じ歳ぐらいのときに、大切な家族を！！」
「は…？」
俺は目の前の男性を凝視した。桐嶋さんは目から大粒の涙を流しながら顔を歪めていた。
温厚で、大人しそうな桐嶋さんの見せる激しい感情。癒えることの無い過去の傷。
「復讐しようとした！！いつまで経ってもモタついてる警察に嫌気が差して、自分で犯人を突き止めた。そして…」
桐嶋さんは目を見開いて、手で首を横に切るように動かす。
「殺してやろう。私はナイフで、犯人の腹を引き裂いた」

「桐嶋さんはその犯人を…？」
俺がそう問うと、桐嶋さんは首を振り困ったように微苦笑した。
「でもね。そのとき私の中に一瞬の迷いが生まれたんだ。人を殺めることに対する恐怖が。…結局犯人は大怪我を負ったものの、致命傷には至らなかった」
「…」
「もちろん私は逮捕された。なんて馬鹿なことをしたんだと、自分を責めた。今度は人を救う立場になって、犯人に復讐をしようと志し、一生懸命勉強した」
「そして、今の自分がいる。とでも言いたいんですか」
「違うよ」
桐嶋さんはいつの間にか俺から手を放し、冷たい床を食い入るように見つめていた。
「前科者は警察にはなれない。拓哉君、君が罪を犯し、そしてその罪を償う覚悟があったとしてもだ。結果的に自分の人生を、掴めるはずの幸せを逃すことになる。君はまだ若い。若くして、大きなハンディを背負うことになる。…ちょっと、お喋りがすぎたかな」
これから…？考えたことも無かった。俺は幸せにはなれないのだろう。…いい。かまわない。幸せにならなくてもいい。瑠佳と過ごした四年で、俺はもう満足だ。

「君と話していると、不思議なことに自分の過去が口から出てくる。…それはきっと、人を救えるものだと思うよ」
「人を、救う？俺は幸せになりません。人は救えません」
意味が分からない、と笑う。
「でも、今の君じゃ無理だ。…人を憎むのは、辛い。そして多くの体力を使うから」
「…」
この人は、憎しみを知っている。どん底を知っている。彼がそこからどうやって這い上がったのか、なぜ刑事になることができたの

かはわからない。
そして俺は、この人と正反対。どん底へ堕ちていく途中。

「俺、帰ります」
復讐という道の先では地獄しか待っていない。地獄しか待っていないと知っている道を、人間は普通は歩かないだろう。
…俺は普通じゃない。大事なのは結果じゃなくて、その過程。たとえ結果が地獄だとしても、その道の途中で森田が苦しめばそれでいい。

「さようなら」
きっと次に会うときは、死体(ひと)を挟んで会うのかもしれない。
去ろうとする俺を、ただ見つめる彼に、俺は微笑んで言う。
「今日はありがとうございました。桐嶋さん」

おかげサマで、イイ情ほうが、テニハイリマシたヨ…。

森田慎司　【2】（後書き）

勝手ながら、【1】で、少し設定を変更しました。

また、少し全話を改定しました。・・・が…になっている程度なので気にしなくて大丈夫です

第四章　ヒトリメ【1】

「ヒトリメは、あんたに決めた」
「なん…っ」
目の前に噴き出す紅。そして悲鳴。一気に紅に染まって行く、両の手のひら。俺の頬に、体に、生温かいものが降り注いだ。体にのしかかる体重。俺はそれをおもいっきり吹き飛ばした。
「悪いのは、俺なんだ。あんたに罪は無い」
冷酷に言い放とうとした。でも、声が震えて言葉にならない。そのときになれば自分は冷酷になれるもの、そう信じていた。だって、もしもそのときに俺が冷酷になれないんだったら、人を殺めることなんか出来るわけがない。
でも、違った…。もし俺がそんな人間だったら、ここに魂を失った骸は転がっていないだろう。

「勿論、フタリメはあんただよ…？」
震える声。
血に染まった、獣の眼。獣の言葉に抑揚は無かった。

＋＋＋＋＋

『犯人は未だ捕まっておらず、逃走しているとみられ…。深夜の公園で二人の高校生が殺害され…。被害者は鋭利刃物で首や胸を刺され、またその後に腹部を強く踏みつけられ…』
休日の昼間。朝からずっと流れ続けるニュースを、俺はどこか人事のように聞き流していた。事件が起こったのは昨日の晩。深夜の公園で女子高校生と男子高校生が殺された、というものだ。

彼らは首と胸をナイフで刺され、即死だった。…

『被害者は両者とも市内の高校に通う生徒で水崎祐太さん（１８）刈谷実沙希さん（１７）…』

テレビの画面に二人の男女の顔が映し出される。よく見知った顔だ。

水崎祐太と刈谷実沙希。

「どっかで聞いたことある名前だな」

どこでだ？と考えるまでもない。俺は自嘲気味に笑った。

殺されたのは俺と同じ高校に通う同学年の二人。面識は…ありすぎる。殺されたそいつらは俺の親友と幼馴染だから。

そういえば、今朝早くに警察が家に来たような気がする。『妹さんを失った後に友人を失ってさぞ辛いだろう』そう言って頭を下げた。俺はただ漠然とそれをみて、そして涙が出るまで大笑いした。

滑稽だ。

警察は慌てて、犯人は必ずすぐに捕まえるから。と俺をなだめようとした。もう耐えられないんだろう、と思ったに違いない。そう、耐えられない。…面白すぎて。

お前らが話しかけているのがその犯人なんだぞ？必ず捕まえる、と言っている犯人が目の前にいるそいつなんだぞ？早く捕まえろ。

結局俺は、警察が困り果てて帰るまで笑い続けた。きっと諦めたんだと思う。唯一の家族を失って壊れたところに、数少ない友人を失って、もう粉々に砕け散ってしまったと思ったのだろう。

滑稽だ。

目の前に犯人がいるのに。部屋に行けば真っ赤なＴシャツがあるのに。台所へ行けば血まみれのナイフがあるのに。

滑稽を通り越して哀れにすら思える。

ひとしきり笑った後、俺はナイフとそのときに着ていた服を処分

した。二人分の血が染みた服は重く、気分が悪くなるほどの悪臭がした。
目撃証言は無かったらしい。もし見られていたとしても、暗くて服の色まで分からないだろうし、第一古い帽子を深く被っていたから顔立ちも分からないだろう。

…ここではっきりしておこう。
祐太と実沙希が殺された。そして殺したのは俺だ。水崎祐太と刈谷実沙希を殺したのは、楠木拓哉だ。

＋＋＋＋　　＋

不意に辺りは闇に包まれる。微かに注ぐ月明かりで、俺の体が照らし出された。
そうか、悲鳴が聞こえないのか…。ようやく死んだのか。俺はそっと、足元にころがるそれからナイフを引き抜く。コポ、と音を立ててまた血が流れ出た。
俺の頬を、血ではない何かが流れる。巻きこんでしまって申し訳ないという気持ちと、これでいいんだというどこか諦めたような感情がないまぜになって零れおちる。
それが転がる死体の体に落ち、軽やかな雫となって跳ねる。いくつもいくつも。
傷つけてごめん。苦しめてごめん。奪ってごめん。でも、じゃあ他に俺は、どうしたらいい…？

違う。この体はもう生きていない。生きていないから、俺の親友なんかじゃない。この死体はさっきまでは俺の親友だった。でも心臓にナイフを突き立てられたことによって、親友の『水崎祐太』ではなく、『水崎祐太の死体』になったんだ。

だからコレは祐太じゃない。もう、タダの屍。タダの肉の塊。そこに祐太はいない。
だから俺はこいつを踏みつけても何も思わない。―ぐしゃり、という肉の音が響いた。

「…た…くや？」
背後から聞こえるか細い声。
「なんてことして…」
「祐太には、死んでもらった」
ひっ、という押し殺した悲鳴。
「…時がきたら罪も償う」
「どうして…。どうして祐太を…？」
「ヒトリメに、一番相応しい」
大切な人が奪われれば、迷いも消える。俺が人殺しになれば祐太や実沙希は俺を止めようとするだろう。やめられない。だから、傷つける。そこで森田に奪われてしまったら、きっと平常心を保っていられない。
奪われるのが怖かった。だから、殺した。人に奪われるぐらいなら、俺が奪う。

失うものは何も無い。もう何も護らなくていい。護られなくていい。もう何も怖いものはない。

「勿論、フタリメはあんただよ」
怖がる実沙希に俺は詰め寄る。乾ききらない紅い血が付いた、ナイフを持ち上げる。
「いやっ…！」
「実沙希…ごめん。祐太にも、伝えてくれ」
実沙希の細くて柔らかい首に、埋もれる無機質な刃物。噴出す紅。生温かい液体が腕を伝う。実沙希が最後の力で俺の腕に縋った。

「た…くやぁ…。たく…。たく…ちゃん…」
「みさ…」
ふっと力の抜ける手。離れていくぬくもり。
ドサ、と実沙希の体が地面へ落ちる。やけにゆっくりと。たった数秒の出来事なのに、俺にはそれが永遠に感じられた。死んダ。俺ガ殺シた。

「なんで、こんなにあっけなく死んじまうんだよ……。お前らも、瑠佳も…」
目の前に転がる二つの人型。そっと触れると、瑠佳に触れた時と同じように冷たく冷え切っていた。

大切に想う人がいると、それは人の弱みになる。もしもその人を人質に捕らえられたらどうだ。その人を盾に脅されたらどうだ。こっちは手も足も出なくなる。

だからいいんだ。殺したって。

俺はさっきまで『刈谷実沙希』だったモノを踏みつけた。これは『刈谷実沙希の死体』であって『刈谷実沙希』本人じゃない。

だからいいんだ。踏みつけたって。

深夜の公園に、ただただ不気味な音だけが響いていた。

番外編　おさななじみ

「たーくーちゃん！　あーそーぼっ！！」
キャッキャっとはしゃぎながら公園の反対側から女の子が走ってくる。スカートがふわふわと揺れ、愛らしい。
「そんなに急ぐと、ころ…あっ」
言っているそばから実沙希が派手に転ぶ。拓哉は実沙希のそばに駆け寄った。
「だいじょうぶ？」
「だいじょーぶ！！」
そう言って笑う実沙希の頬に、涙の筋がいくつもあることに拓哉は気づいた。
よく見ると、実沙希の服は泥や土で汚れている。
「みーちゃん、変な子ー！！」
「もうあそばなーい！！」
「あそばなーい！！」
そのとき、遠くの方でほかの子供たちが何か言っていた。拓哉のみたことのない子たちだ。
実沙希はチラとそちらのほうを向くと、黙ったまま唇を噛む。
「どうしたの？」
「みんな…意地悪するの…たくちゃんは意地悪しないよね？」
声を震わせ、今にも涙が零れおちそうなくらいに目に涙をためて。
「おれは、意地悪しないよ。みーを守ってあげる」
「ほんとう！？」
「ほんとうだよ」
「うれしいっ」
拓哉はそっと実沙希の服についた泥を払ってやった。
それから実沙希は、毎日のように拓哉と遊ぶようになった。拓哉

の近くにいれば、拓哉が怖いのか誰も実沙希をいじめたりなんかはしないし、拓哉も別に嫌じゃなかった。

ある日。拓哉が久しぶりにちょっかいを出してきた悪ガキを追い払うと、実沙希が唐突に言った。

「みーね、おおきくなったらたくちゃんのお嫁さんになる！！」

「おれのお嫁さん？」

「うんっ」

「うーん。いいよ」

実沙希がうれしそうに跳ねた。

「約束」

実沙希が自分の小指を差し出す。拓哉は一瞬戸惑い、そして自分も小指を差し出した。

「ゆーびきーりげんまん、うーそついたらはりせんぼんのーます！ゆびきった！！」

＋＋＋＋＋

そしていつからだったか、実沙希の呼び方が『たくちゃん』から『拓哉』に変わった時、拓哉の呼び名が『みー』から『実沙希』変わった時、その約束は自然となくなった。いや、忘れてしまっただけかもしれない。

小学校に上がるまでは仲良しだった。いつからか拓哉と実沙希は互いを意識して、普通に仲は良かったが、一緒に遊ぶということはなくなっていった。

実沙希の手が拓哉の腕から落ちた時、拓哉はあの約束を思い出していた。いまさら思い出したって仕方のない、ただ苦しいだけの約束を。

「ごめんな。…みー」
サラサラと流れる長い髪が、しばらくの間拓哉の腕に留まっていた。腕の隙間から零れ落ちていく命の欠片。

微かに聞こえたささやき声。きっと、拓哉自身も気づいていないだろう。
まだ死にたくない。そう体は足掻くのに、心はすっきりとしていた。もう言葉を発することもかなわない。動けない。
『自分が生きてたって、大切な人が幸せじゃなかったら生きてる意味がない』
だからもういい。納得なんかできないけど、これで少しでも拓哉の気持ちが楽になるなら。未練が無いって言ったら嘘になる。これから先、もっとたくさんのことが待っていたはずなのに、実沙希の人生は閉ざされる。そんな理不尽な…。でも、叫びの変わりに出てきたのは別の言葉だった。

「……たく…ちゃん」
裂かれたはずの声帯を使って、動かないはずの腕を動かして。

濃密な闇に、意識が溶けて行く……。

番外編　おさななじみ（後書き）

今回はちょっと短めです。
普段も十分短いですが…。

第五章　ケモノ　【1】

俺は何をするでもなく、ただぶらぶらと歩いていた。川に面したこの辺りは人通りが少なく、たまに見かけても犬か猫だ。

「あ…楠木さん！　楠木さんですよね？」

パタパタと足音を響かせながら一人の可憐な女性が駆け寄ってきた。ふわりと空気を含んだように柔らかそうなワンピースを着て、なにやら大きな箱を大切そうに抱えている。

「茜さん」

俺は足を止め、彼女―茜さんが追いつくのを待った。

程なくして隣についた茜さんは肩で大きく息をし、とびっきりの笑顔を俺に向ける。

「そんなに急がなくたって、俺は逃げませよ」

「なんだか早く追いつきたくなってしまって。それより日曜日、いらっしゃらなかったようですけど、どうかしましたか？子供達が寂しがってました」

俺は毎週日曜にしらゆり園に行き、子供達と遊んでやっていた。他にすることも無いからだが。

「いや…急用が入ってしまって」

「そうでしたか」

納得してうんうんと頷く茜さんを見ると、俺の胸の奥がちくりと痛んだ。

その日は、とても人前を歩ける状態じゃなかった。ましてや子供達と遊ぶなんて、無理だった。

「ふふ。本当は、子供達よりも私のほうが寂しかったんですよ」

「へ？」
「何でもありません。独り言です」
唐突に言われた一言に俺が戸惑っていると、茜さんは笑って付け加えた。
「そうだ。今から時間あります？」
「はい。暇です」
「よかった。しらゆり園まできませんか？おいしいケーキを買ったんです」
なるほど、その大きな箱はケーキだったのか。道理で甘い匂いがする。
「喜んで行かせてもらいます」
「本当ですか！！」
笑顔がぱっと輝き、まるで花でも咲いたみたいだ。自然と俺の頬も緩み心が温かくなる。―同時になぜか胸が痛んだ。

＋＋＋＋＋

「やったぁ！　茜ちゃん、ありがとう」
「ありがとお！！」
茜さんは微笑み、子ども達の頭を順番に撫でる。
「ちゃんと、手を洗ってから食べるんだよ？」
「はぁーい」
元気な足音が隣を駆けていった。
「楠木さん。どうぞ？」
「あっ。いや、俺はいいんです。すぐ帰らなくちゃいけないんで」
家の中に入るよう勧められたが、俺は首を振った。
「そうですか…」
残念そうな声が聞こえる。

…。なんだかいやに胸が苦しい。鉛でも沈められたかのように胸が冷たく沈み、先程までの高揚感はまるでない。
子供は正直だ。俺の変化を敏感に察知し、自分の身を守るため、無意識に俺を避ける。
「どうか、しましたか？」
「…なんでもないんです」
俺が俯いて言うと、茜さんは眉根を寄せた。
「なんでもなくありません！！」
まるで子供を諭すような口調に、俺は驚いて頭をあげる。
茜さんはしめた、とニヤリと笑い、ケーキの中に入っていたのだろう保冷剤を俺の頬に当てた。ひやりとした感覚に仰け反る。
「ちょ…冷たい！！」
「元気出ましたか？…会ったときから、ずっと元気がないようだったので」
いつもの、あの悪戯っぽい笑いを見せられて、俺はたじろぐ。
「そういう風に見えました？」
「ええ。見えました」
「そ…そうですか…」
できるだけいつも通りに振舞おうとしても、やはり影ができてしまう。子供にはそれがわかったのだろう。
「苦しいですか？」
「え？」
「なんだかずっと、何かに耐えているような顔をしていたので」
それは…と思わず口ごもると、茜さんは一瞬寂しそうな顔をし、そしてまた笑顔を見せた。
「私の前では無理しなくていいです。…私が出来ることなら、なんでも言ってください」
俺の中でなにかが、ストンと落ちたような気がする。
「そう…その顔です。なにも考えていない楠木さんも素敵です」

「拓哉」
たじろぐのは茜さんの番だった。何も考えていないのに、まるで誰かに操られているかのように口から言葉が出てくる。
「拓哉って、呼んでください」
「た…拓哉？」
…。…。沈黙があった。
俺と茜さんは互いに目を見合わせ、そして互いに真っ赤になった。
「い…いまのはその…俺の考えで俺の考えじゃないって言うか…俺の言葉じゃないっていうか…。だからその、別に言わなくてもいいっていうか…」
なんでこんなことしか言えなんだ。と俺は自分で自分を殴りたくなる。
茜さんはと言うと、ただ黙ってうんうんと頷く。顔は耳まで夕陽の様に真っ赤だ。
俺は沈黙に耐えられなくなって、気になったことを聞いた。
「あ、茜さんはその、どうしてここで働いているんですか？」

第五章　ケモノ　【1】（後書き）

今回は少し短めです。

次話も短めになる予定です；；

ケモノ　【2】

「実は…」
そう言って声のトーンを落とす。聞いてはいけなかっただろうか。
「私、恥ずかしながら医者になりたくて…」
「医者？」
医者、というよりも、それとここにいることとどう関係があるのか疑問だ。
「呆れますよね。冗談だと思うかもしれませんが、本気だったんです。誰かを助けたくて…。助けるっていったら、お医者さん、ってしか思いつかなかったから。ただ漠然と、『医者になって誰かを助けるんだ』って勝手に意気込んで。今考えると、本当に馬鹿だったなぁって」
「…俺は、馬鹿だとは思いません」
「ふふ。ありがとう。でも…落ちたんです。夢と現実は違い過ぎた。結局受かったのは、医者になんかなれっこない、三流大学だけで」
「え？」
「私には時間が無かった。私は、幼いころに母を亡くして、男手一つで育てられてきました。でも、そんな父が病気で。その病気を治すことはできなくても、一人でもやっていけるって、父を安心させたかったんです」
俺はなんと言ったらいいのか分からなくて、目を泳がせた。
「焦って、焦って、焦って。一生懸命勉強しても、思い描いたものには到底及ばなくて。絶望して、そんな自分が嫌で嫌で…そんなときに出会ったのが、ここにいる子供たちなんです」
茜さんは目を細めると、子供たちへ微笑みかけた。優しい、自愛に満ちたまるで母親のような微笑みを。
「ここの子達は辛い境遇なのに常に笑っていた。私はその笑顔に救われたんです。そして教えられた。人の微笑みは、こんなふうに人

を救えるんだって。医者にならなくても、助けることはできるんだって。私は実家に帰って、家族と共に父の最期を看取りました。父の顔は穏やかで…。父を最後に、『助けられた』かなって。だから私がここにいるのは、私を助けてくれたこの子達を、今度は私が『手助け』したいと思って…

そう言って笑う茜さんの目に、涙も後悔も無かった。あるのは深い悲しみだけ。それは、父を失ったという悲しみとはまた違う気がした。

「人間って、どうしてこんなに不完全なんでしょう…」

「不完全、ですか？」

俺は混乱した。完全な人間なんていない。と、よく言う。俺もそう思うし、だから茜さんの言葉が理解できなかった。

「人は、その在り方一つで人の心や人生を救えるんです。私も、もっと早くに気づければよかった。こんなに小さな子だって、人を救うことはできます。それなのに、どうして人の命を奪うことしかできない人がいるんでしょう」

「…」

「その人が憎くい気持ちは分かるけど、それをその人に返しても何にもならない…。ただ憎しみが増えていくだけで、悲しむ人が増えるだけで、自分に何もプラスにならないと思うんです」

胸が締め付けられる思いだった。でも、俺に何ができるだろう。守るものはとうに失った。誰かを憎まずにはいられない…。

「茜さんは…」

「はい？」

「茜さんは、そんな人達を、怖いと思いますか…？変だと思いますか…？」

茜さんは遠くを見つめ、少し考えたあと首を横に振った。

「きっと、その人達は今、すごく苦しいと思うんです。辛いと思うんです。でも私達が怖がって、手を差し伸べてあげなかったら、救

えるものも救えない。私は、そんな人達を助けられる人になりたい。
…ふふ。なんて、そんな簡単なことじゃ―」
「茜さんなら…きっと…できます」
「はい？」
「茜さんなら…」
今だって俺の心を救おうとしてくれている。俺の頬を涙が伝った。
嬉しかった。俺を救ってくれようとしてくれる人が、こんなに近くにいたなんて。
「ご、ごめんなさい。私、なにか悪いことでも…」
「違うんです。なんでも無いんです」
もう少し早く気づけていたら。そうしたら、手遅れにならずに済んだのに。
俺は初めて後悔した。そして森田ではなく、自分が、自分の運命が憎いと思った。

もしもあの時、森田が殺したのが瑠佳じゃなかったら。
もしもあの時、母さんが出て行かなければ。父さんが死ななければ。
もしもあの時、森田に出会わなければ。
もしもあの時、ああしていれば…。

でも俺は、人を殺めてしまった。茜さんがいくら光を差し出してくれても、俺にそれを受け取る資格は無い。この汚れた手で、何も守ることはできない。

俺にできるのは復讐を成功させて、そして罪を償うことだけ。
光に手を伸ばすには、もう『手遅れ』だから――

俺は目元に光るものを拭い、茜さんに一礼して駆け出した。決心

が揺らがぬうちに。
風が、頬を撫でる――

ケモノ　【3】

「っはぁ…。ど…うして、こんな…こと…。あ…っ…。あなたの…目的はっ…なに！？」
「目的？　…俺はあいつが苦しめば、それでいいんだ」
「こた…えに、なってない…っ！」
「黙れ」
俺は女の頬を叩き、縛り上げた腕をさらに強くひねった。
「いっ…やめて…」
女は床に這い蹲り、涙や何やらでぐしゃぐしゃになりながら懇願する。
「もう…やめてよ…。私が、何をしたっていうの」
「お前は何もしちゃいない。したのは…お前の兄貴だ」
この女は、あいつの実の妹。はたしてあの男がこの程度で苦しむかどうかは定かではないが、この際どうだっていい。
俺はまた、女の肌に手を這わせる。白い肌は柔らかく、手のひらに吸い付くようだ。
「い…や…。やめて！　いやぁ…」
女は悲鳴を上げ、俺の足に縋りつく。
「お願い…もうこれ以上…」
「駄目だ」
「いやっ」
女が顔を上げた。絶望に歪んだその顔はとても美しいとは言い難く、しかしその濡れた瞳だけは反抗的に細められている。
「まだ、気が狂ってはいないようだな」
気が狂っていないことが、果たしていいことなのか。ここから先は狂っていたほうが楽かもしれない。
俺は女と同じように目を細め、手中に光る鋭利な刃物を握りなお

した。

＋＋＋＋＋

…。

……。

「ふう…」

俺は浅く溜め息をつき、いまだに夏の暖かさを宿す太陽―いや、太陽の浮かぶ空を見つめた。太陽光とは逆に、凍えるように冷たい秋風が俺の髪を撫でる。

「次の獲物は…」

無意識に呟くと、自分の意思とは反対に口元が歪む。歪んだ口元とは逆に、冷めたように光を宿さない眼。

そして吹き抜ける風。まるで、俺の胸に開いた穴を吹き抜けていく。

「いいさ…。全部、殺してやる」

森田（あいつ）の関係者は、片っ端から殺してやる。

「憎め。俺を憎めよ。憎んで苦しめ。苦しめば、楽にしてやるから」

俺はポケットに手を突っ込み、中にあるものを確認する。生温かい液体に包まれた、冷たいそれ。耳にこびり付く悲鳴を思い出し俺はうっとりと眼を閉じた。

＋＋＋＋＋

「どちら様…！？」

「叫ぶなよ。じっとしてろ」

「それ…その…」

「大丈夫だ。あの世で娘が待っている。息子もすぐに逝くから」

「むす…っ！　……」

「…苦しまないように、一発で殺してやった。感謝しろ」

カチ、カチ、カチ。
時計の音は、休まずに聞こえ――。

＋＋＋＋＋

「うっ…」
吐き気がこみ上げ思わずその場にうずくまったが、ここしばらく何も口にしていないことに気づく。吐くものがなければ吐けない。
俺は諦めて立ち上がった。

じゃり。
足元の砂が音を立てる。
日はもうとっくに沈み、辺りを月明かりと儚げな街灯が照らしていた。

「まるで…ケモノだな…」

俺は、ケモノだ。
森田の母親を殺し、罪を『犯した』。森田の妹を『犯した』。
森田のことを考えると胸の奥が痛むように疼き、森田の妹である女のことを考えると下半身が疼く。

人を殺したくて仕方がない。犯したくて仕方がない。
こんなのが、人間のはずはない。

だから、俺はケモノなんだ。

だから、情というものをしらないんだ。

ケモノ　【3】（後書き）

遅くなって申し訳ありません；；；；

ｐｃの調子が悪いので、更新の頻度が遅くなります…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5945v/

復讐―ツミヲツグナエ―

2011年9月29日16時54分発行